

特集「編集委員今年の抱負 2011」



子をもつ AI 研究者として

鈴木 優 株式会社東芝研究開発センター

これまで一度も「今年の抱負」なるものを考えたことがないのだが、エッセイのつもりで気楽に書いてよいという編集委員長のお言葉を真に受けてみることにする。

我が家には2歳7か月と10か月の二人の息子がいる。子をもつAI研究者は皆同じように思うのだろうが、乳幼児というのは大変興味深い観察対象である。

長男は生まれてしばらく指しゃぶりができなかった。正確には、私が長男の手をつかんで口のところにもっていったり、何かの拍子に自分の指が口に触れたりするとうれしそうに吸い始めるのだが、自分で指を口にもって吸うことができない。育児書によると、指しゃぶりができるようになるのは大体生後2~3か月頃ということらしい。

いつ指しゃぶりができるようになるのかと思い、長男の観察を続けていると、やがて額や頬、鼻へとランダムに親指をもっていき、偶然唇に収まると指しゃぶりを始める、という行動が見られるようになった。まるで親指を探針にして自分の顔を走査しているかのようだ。そのうちしばらくするとベビーベッドの上で仰向けに寝ている状態であれば指しゃぶりができるようになり、さらにしばらく経つと誰かに抱っこされているような不安定な状態でも自在に指がしゃぶれるようになった。

この観察から私は、長男が指しゃぶりをできなかったのは、自分の腕を適切に制御できなかったか、自分の身体の位置関係を把握できていなかったためと推察した。育児書では新生児が指しゃぶりをできない理由として前者をあげることが多いようだが、姿勢によって習得までにかかる時間が違ったことから、私はどちらかという自分の身体のモデルの学習に時間がかかるためではないかと予想している。さまざまな初期条件から顔面を走査することでしだいに顔の各パーツや腕の位置関係を獲得しているのだろう。

ちなみにそんな長男に対し、二男は生まれたばかりのときから苦もなく自在に指しゃぶりをしていた。長男より1kgほど大きく生まれたために腕の力が強かったのか、あるいは母親の胎内で身体モデルの学習を済ませてしまったのか。兄弟であっても一人一人発達の様子が違うことは、親としては毎日が発見という感じでおもしろ

いが、子どもの知能や認知を扱う研究者は発見がたくさんありすぎて大変だろうなと思う。

幼児が言葉を習得する様子も興味深い。現在長男は3~4程度の単語を並べた文を発声することができる。正確にはもっと長い文章も話せるのだが、何を言っているのか理解できない。それはともかく、長男は「犬」や「車」といった名詞群よりも「美味しい」という形容詞を先に習得した。事物を表す名詞が単語として最も簡単で、習得も早いだろうと予想していたのだが、感覚を表現する形容詞のほうが乳児にとって理解しやすいということだろうか。

このことについて、言語学を専攻していた知人の意見を聞くと、「いぬ」は「わんわん」、「くるま」は「ぶーぶー」というように、そもそも幼児語は感覚（この例では聴覚）に対応しているのではないかと、言われ目から鱗が落ちた。幼児語なんて子供みたいで気恥ずかしいと敬遠していたが、育児に用いられるのにはきちんとした理由があったようだ。

そんな長男もようやく「東横線乗る」、「三田線乗った」、「湘南新宿ライン乗りたい」、「南北線好き」、「日比谷線嫌い」など名詞を含んだ文を話せるようになった。時制やモダリティを自然に使いこなしていることにも驚かされるが、親にはそんな趣味はないのに、男の子はいつの間にか電車好きになるというのも不思議で、いつか計算機にこのような自発的な願望や感情をもたせることができるだろうか、と思う。

そして子をもつAI研究者としてもう一つ思うことは、この子達の未来に貢献できる研究がしたい、ということだ。私はこれまで自然言語処理や情報検索の領域で仕事をしてきた。もちろん、どんな研究も何かしら未来に貢献するものだろうが、子供達の世代の世の中を豊かで持続的なものとするために、エネルギー、気候、環境など取り組まなければならない課題はたくさんある。これまでと全く違う領域に今から取り組むことは難しくても、目の前の課題だけに視野を狭めることなく、世の中の大きな課題にAI研究者として取り組めることはないかと常に考えていきたい……これが私の今年の抱負である。